木曾路名所圖會 一乾

地 二四九 一

915.5
327
Vol. 1

こゝひとれにあふしはてゝも
しれと女の讒言之ゝきも
かよひて此書くを宗長思を
もこゝりし周紙为御まきもとハく
ありしより山名根本をうりし比山路よ
まちの国ふされ新古今遠きは

滋賀縣立彦根中學校

吾妻路に遊べる心ありて志も
かれぬたる所の俳もれ有りたに
まかれねるよそくうしかの旅路は
いく立人の為りしよきは道数の雅
をもうつく思ひ世農人をともなひこえし
むかしわすれなりきかし秋里籬嶋是を識

心さしに勇れ老らくをわすれ
大木曽小木曽のおそろしきかけ橋
のあやうさをこえそれちらすは
はけしきちられわたりの所々
まくを手つかへつれつれしに
言葉よしなきに求らるゝやま

されといふみちしる山ことは之叙
しすあるよ

文化二乙丑三月

文章博士菅原尚長卿

松鶴斎主人題

於むかしおもへる人のうちそのなかに
あるも言わけ物かしあるしてなるへき
まつもと此ところ見ことにおもひける
物をもいさゝか筆をも分の難儀
むかし此頃に身體大和をこし
かよふことにおとしりてぬるもの

帰まらの絵巻の事はとくくはりて
何かしきやうにかたの中れむの秋は
すくつきて新しかうりすけるうちを
のこし商こそぬり法に庄ほる当志
守り勝人の秘也人の里をとくしける
新きといとはりの飛筆埋りかね

つとめとくなつしめ一ついつ法のなを
思ふにぬけてもいたらくのきせくみ
中臣勝まつ源清原のくるま
よるとりつくして白縫のいしぬ
みちのおくの大くのくにさしかる
筑ちうつきとして唐衣をかは法

小路をもはるかにすぎて我門を出れ
ばしもあらたまりて三日に一度なる
ぬにしまゝにかよひつゝのゝ後もはなき
しさて水にもあらぬ人のはかなき
ゆきて一せよとおもひし我身つらくも思はれ
こそあるかなしきのみかはしまそ有り

こゝろにもあらぬ我身のおもひに
なりて人をうらみしかど人の
心にあはれとおもひならぬ事
なきにしもあらぬ事にてしめよ
まことにけふはいかにしてか
紙のたゞなかにや、ゐのいつはり

言ふくは地をかへて情をとく人の志を寄
切せまて新たる所のしかく辞

文化二年二月

富士谷成元

しるす

岐阻路名所圖會自序

岩屋嶋美濃にもあるなるをみちもきはめて
駒引神乃身ゆつけあつまれるもの集なるを
峰の尾六十九つの宿々を経て通を経て木曽路の
おもむく此道をも続紀に大宝二年の野圖
岐蘇の路はむかしくにとこれそのこれに多く
日本武尊碓日のけわしきあつまの陣を橘姫を
慕ひ給ひたまひ科濃の坂の路をわけ文古事紀に
阿智のたるへ甲斐より科野にむかひ給ふ

しる者東季の伊那にもはるかに冬事やうくなるよりゆかりしと
見えたるも三代實録に八詔ありけるに左馬権少允
従六位上藤原正範を以みさかの路ひて木曽を
之路国に定られし事も星年の霜かさねてみさか
をも改まりかはりしより古の如くみちかは志るぬは
木曽に諦せやらて今是いはしへの名も聞ハ探ぬ
菅原山伏屋の里なども明荒れはてれ侍らし那
娘捨山も通ふる遠く梯はしも今はあるゝ也此
河も嵩高貴もわきまへしなしにとうし小野の滝は

おのゝがゝ床ゆて寝覚の床は金地もに寛しく侯
三峰の里を名の桔梗か原ゆ侍く田畑をなり
諏訪は湖氷の橋ハ早振神は川に架を見
古梶もかへ侍寿ゆ富士の乾をあるかなりて諏訪は
神ゆかるまゝ御射山の保屋の家らをは秋風に吹をそ
麓の浅間をふ嶽の如くに聳駒ゆる許
和田あけの峠かし多摩川の名のかはる志るかな
碓井峠のかは長き絶頂浅間山はふもと
碓氷は坂を越て高きやうは尾の後はしく妙義山八

許しありてやくかうき川に佐野の舟橋のあとくちはて
國郡の里熊谷乃寺氷川濃尾し後の社深く
戸田川をわたりて江戸にいたる古道かしハあやうき
所おほくしるく道ゆく人もまれなりしかども
西より上人つかしきかたちに種々しかや五つ合体の
残れるもあらずに義仲あその誠己の家を建てあやまち
所の名にめり今ハ絶れる
御代にあひて道もさだまりかけてしもたいらかに
へきりくしれもなく出来の時ゆきかくせき満る

はやとなりも難く海をわたる事へとかかし山賊のみ
おほくしるく人の心詐妄おほく剛毅木訥も仁に
かなひ人馬のちからほこらく山川れかれ草木のたてる
外國にとられて字局ハしく日々に目を悦ばしむ
行人も渡のふもとく難くしあ在れ社きしく
宿道七つの上にありて海道の湊にて日光山
かし満ち香取筑波根鹿島のもかのとありあるる
名どころ詠じもしにとあんにとおくかれあ川めてしてを
の碑れをし出する紙かつて見て書海士の饗を見

そ筆し出さんとす人々のおもむきに補ひ
給りはゝ幸ならんとのそ

文化元きのへ子の九月

秋里籬島

凡例

一 岐阻路名所圖會ハ所謂東山道なり今俗ニ中山道といふ是ハ京師より起りて江戸に到る都て近江美濃信濃上野武蔵等五箇國乃道條なり古ハ吉蘇街道といふ六十九駅道法百三拾五里餘なり名所古跡神社佛閣を國會し只駅毎に案圖をもかけて記し行程ハ其下に著さん

一 京師より草津の駅までハ東海道名所圖會に出しゆゑあくに首略して其残れる所を補ふ其より鍋尾を先編の例をもつて記し街道の神社ハ延喜式神名帳に載るを選びてあらはし又大変するものハなるにあらね所謂御嶽駒ケ嶽なと

一 渾て方位を示すハ其宿位に随ひて其の東何里某村小何町にありと證し又神社佛閣乃左右ハ其神躰本

遠るの左右あり又道條左の方なれどもとは京師より東関に
赴く旅者の左右あり

一　五巻六巻ハ江戸より東に到て香取鹿島筑波山日光迄の
名所をあつめ岐蘇圖會附録ニ備ふ

一　日光山ハ貝原氏未刊記あれバ彼地にて専ら繕畫又ハ日光
名勝志の新板を抜萃し又古老の懐旧を抒ふ脱漏あるは
後人の補遺を俟而已

木曾路名所圖會巻之一

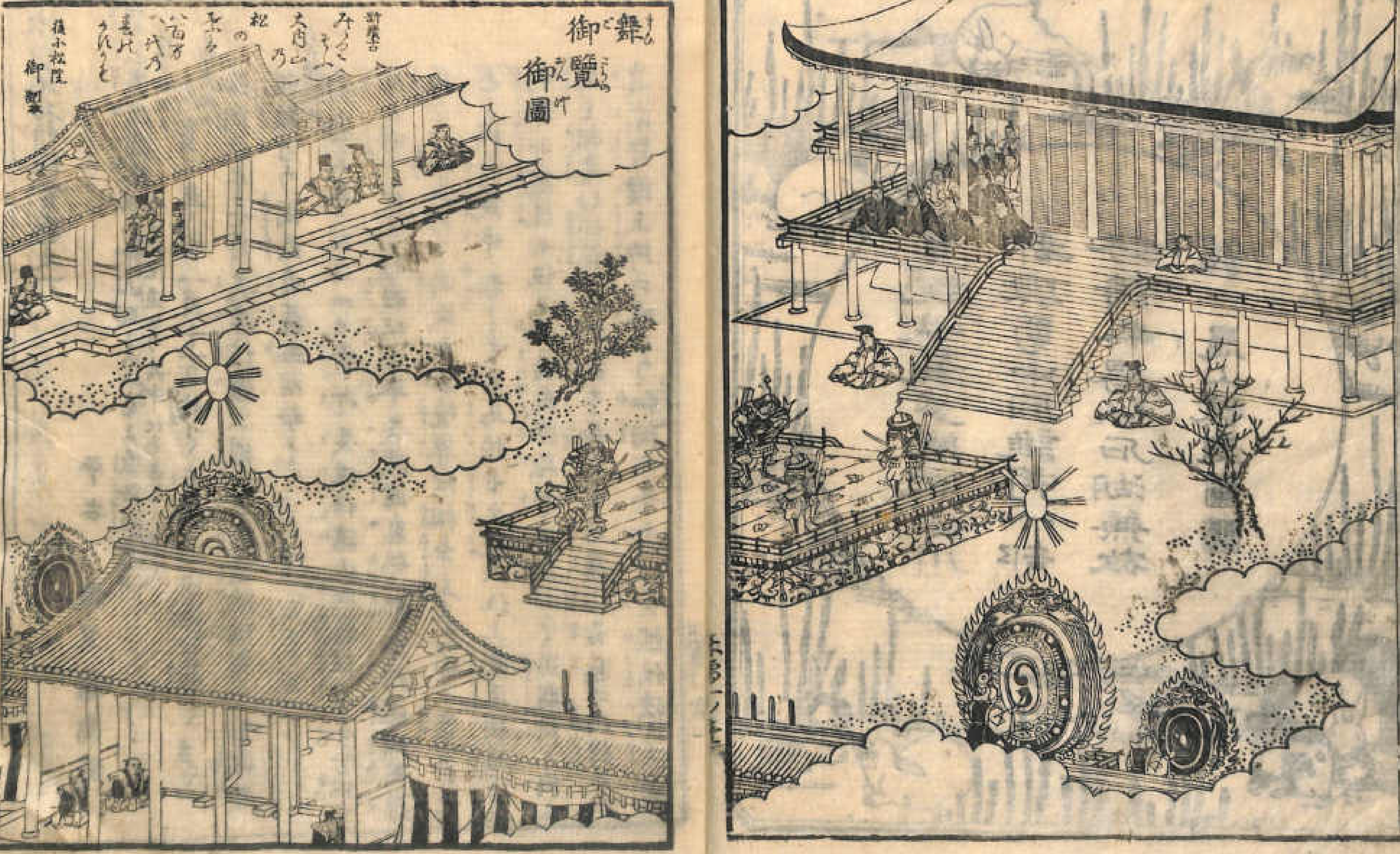
目録

内裏舞御覧御圖　洛三條橋　白川橋
粟田山　日岡嶺　御廟野　四宮河原
追分　走井　蝉丸社　關寺
關清水　○大津　以禮觀音　三井寺
唐崎松　矢橋渡口　膳所城　粟津原
勢田長橋　石山寺　紀行　野路玉川　矢倉
○草津　大寶社　○守山　守山寺
橋觀音　野洲川　布施　御上神社
三上山　篠原社　平宗盛墳　蛙不鳴池
鏡山　鏡宿　牛若丸元服家　長者雄

十蓮坊墳　武佐寺　○武佐　八幡
比牟禮社　本社　神楽殿　天照太神社　拝殿　稲荷祠　楼門　若宮　鳥居　天満祠　末社
長命寺　水茎岡　蒲生野　老蘇杜
奥石神社　鷦鷯神社　浄厳院　摠見寺　三層塔　圖面圖
安土山古城　附記　桑実寺　箕作山古城　小松寺
瓦屋寺　観音正寺　観音寺古城　地獄越
石馬禅寺　本堂　之図閻魔堂　方丈　役行者　地蔵堂　雲居松　毘沙門天　石の駒　鏡寺八大竜王　駒繋松　紫石　馬墳
愛知川　○愛知川駅　四十九院　唯念寺
葛籠細工店　犬上川　○高宮　高宮縞　細布店
多賀大社　本社　経蔵　末社　神楽殿　神楽殿　楼門　三宮　日出杖　[illegible]王堂　[illegible]針石
不知哉川　鳥籠山　大堀八幡　小町塚
○鳥居本　米原道　磨針嶺　彦根山
千々松原　磯崎祠　筑摩祠　筑摩野
朝妻里　長濱　将軍山八幡宮　本社　鳥居社
熊野祠　地蔵堂　什寳数品　稲荷祠　護摩堂　薬師堂　妙覚院　本社　観音堂　本地堂　地主神　宇賀神　祖師堂
蓮華寺　本堂　六波羅山　琵琶湖　竹生嶋　余湖　○番馬　地蔵堂
土肥塚　四石　三水　○醒井
○柏原　伊吹山　大丈[illegible]　長尾謙信塚

木曽路名所圖會巻之一目録　終

見說岐蘇多勝縦山川
都與蜀中同誰將一部
好詩料得似石湖無放
翁　愚山愼題


舞御覧御圖
新嘗
みかくそふ
大内山乃
松の
葉ふる
八百万代乃
春光
かれかも
権小松殿 御製

木曽路名所圖會巻之一

平安　秋里籬島編

東山道岐蘇路は中山道とも云。南に東海道あり、北に北陸道あり。其中にあるゆゑ斯く號く

續日本紀云 大寶二年十二月十一日始て吉蘇山の道を開く。また

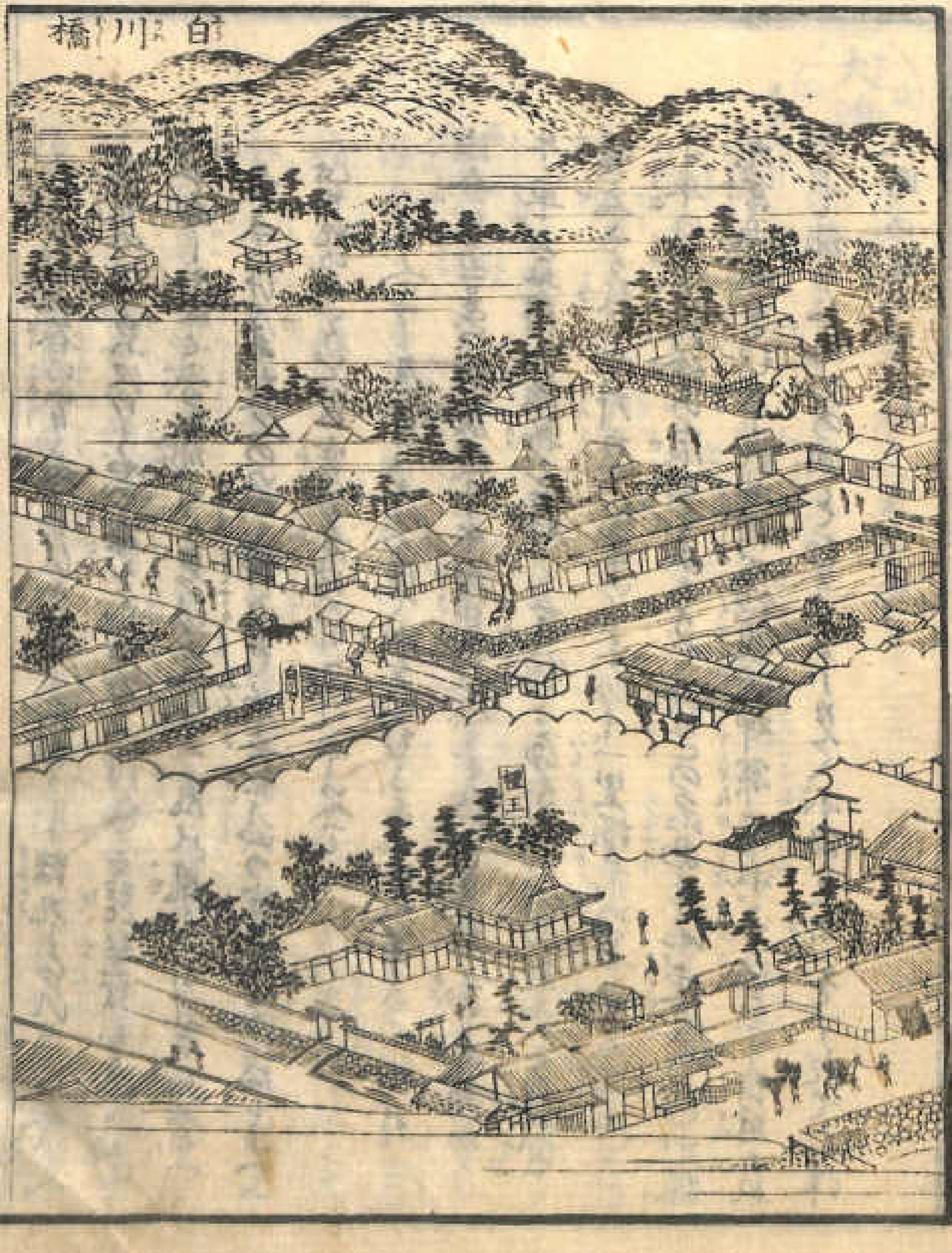
元明帝紀云 和銅六年七月美濃信濃二國の界径道險阻にして往還艱難なり。因て吉蘇路を通ずるなり

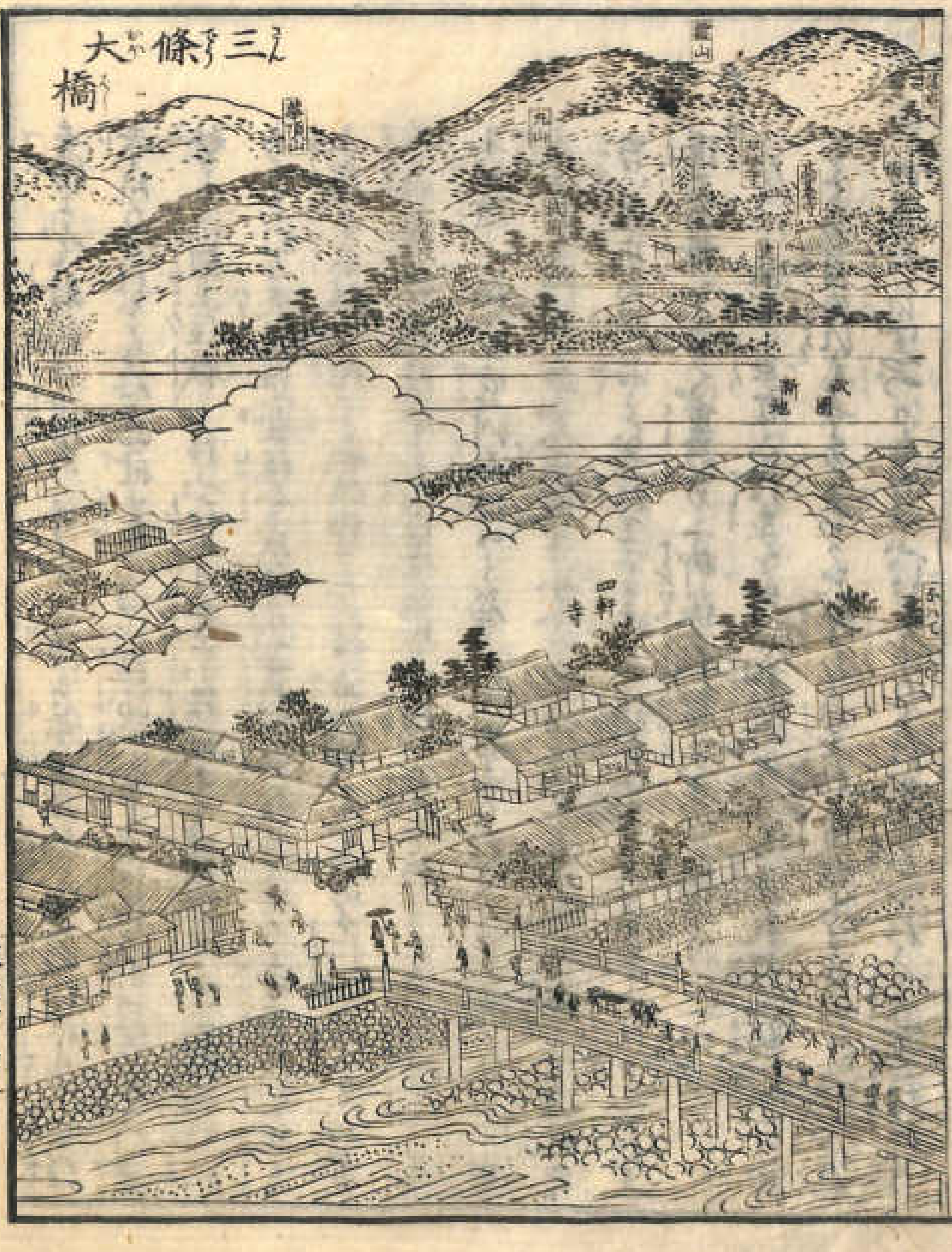
三代實録云 元慶三年九月四日辛卯美濃信濃の國縣坂上岑を以て國の堺とせしむ。縣坂上岑は美濃國恵那郡と信濃國筑摩郡との間にあり。両國古来境界を相争ひて久しく論じ決せざる所ありて貞觀中勅して左馬權少允従六位上藤原朝臣正範、刑部少録従七位上靫負直継雄等を遣して両國司と地に臨みて相定めしむ。正範等舊記を検るに、吉蘇・小吉蘇の両村これ恵那郡絵上郷の地なり。和銅六年七月美濃信濃の両國の堺径路險隘往還甚難きを以て吉蘇路を通ずと云々。七年閏二月美濃守従四位下笠朝臣麿に封邑七十戸田六町を賜ふ。少掾正七位下門部連御立、大目従八位上山口忌寸兄人各位階を進む。吉蘇路を通ずるをもつてなり。今此地美濃國府を去る事殆十餘日、信濃國に属するは遠近によれば、若信濃の地とせば何ぞ美濃の國司をして遠く關に入て彼道を通ぜしめんや。由是正範の定るところに從ふ。按ずるにこれより前六百年餘に日本武尊東征の御時、碓日嶺にて阿豆麻波夜と歎かせ給ふと日本紀に見えたり。又日本紀に甲斐國を経て科野に越て尾張にいたり給ふと見えたれば、吉蘇路は延喜式の頃より信濃なりしや。和奇集にもよめり

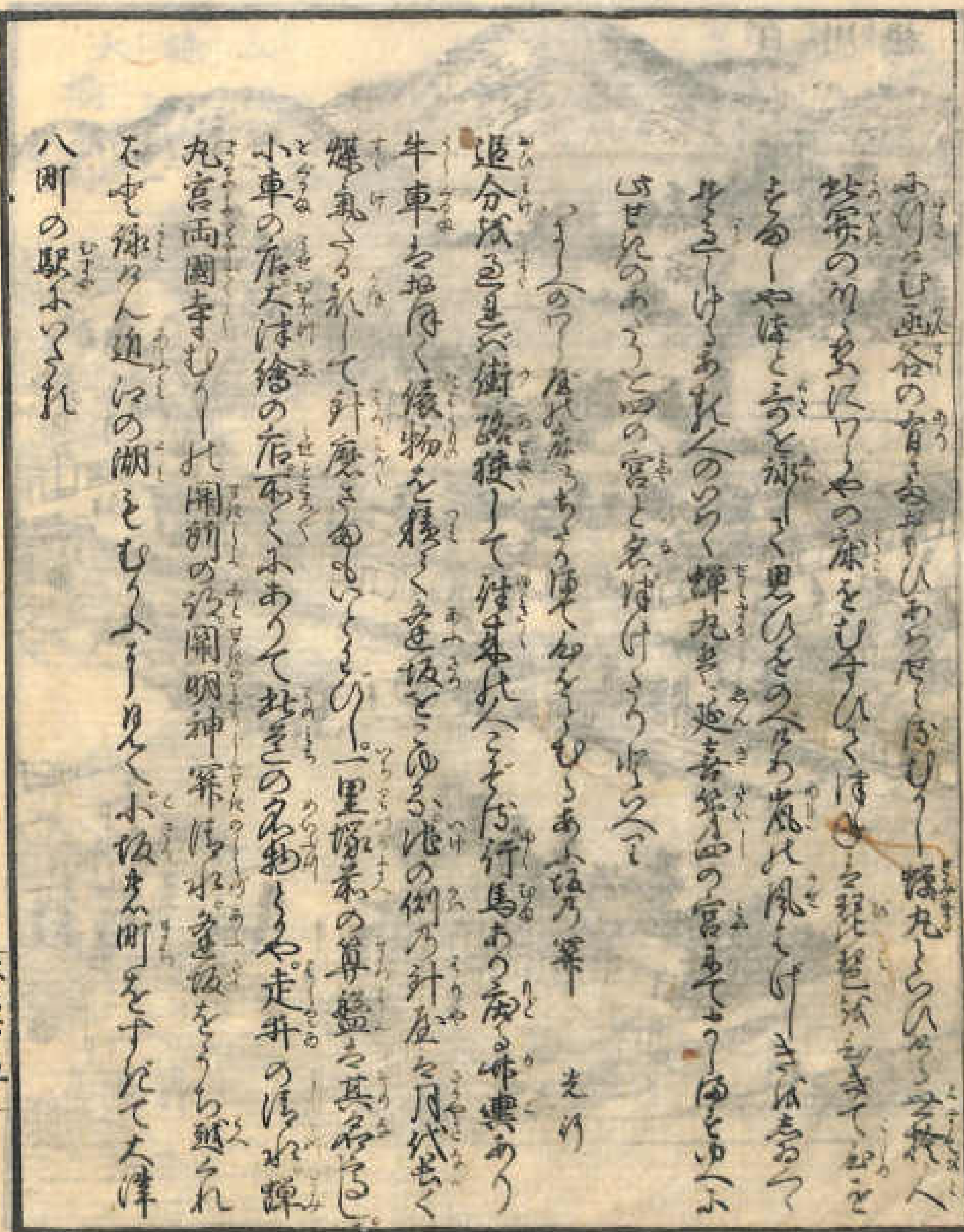
拾遺　中々にいひもはなたで信濃なる木曽路の橋のかけたるやなぞ　源頼光

洛の南風さそふ賀茂の流れに添ふ宮風坊の橋ぞやその頃河原院塩竈てふ
古跡都島の左に年久しく名残る碑あり此辺遠道の名ある處をすさみ
てまづ都図会をはじめとして洛の畿内をめぐりぬる人多く見る事しく
雲のあなたへ行らん七年此方へ出しあり都より東海道三国へを
はるばるとび越え吉蘇路を経て江戸へいたる書取赤坂筑波山
をめぐりかけまくもかしこき月光の　御宮を拝し黒髪山に登れ
其道筋の名をかき所をたづねてめぐりし思ひより古跡にちなみて
貧の事も眼にまかせ夜の旅せしはありても側の碑を見れば道祖神あり
すなはちあひてさまし京わ二の前此夏御祭月中の六日なりしかふ
日に旅立なれば都の南なれば若葉滅道の路より赴きて。くだり
行稲荷山の道より藪の中深草の嶺を越て元山出て
山科の里は名高き農家多く金屑丸を見かけて牛尾
道の別れにいたる。これは左にまがりて此奴茶屋は先祖の所

毎衛にて射術の達者なり今に唐まの装束は飾る此山は伊予に安祥
寺なりこれをまさに高野堂と毘沙門堂は伝教大師の開基御寺
務る法親王住職し給ふ右に日蓮宗に檀林あり護国寺といふ諸羽の社
ありこれは天津児屋根命を祀る四宮村に十禅寺なり本尊は聖観音
上宮太子の御作なりや此所は往古の物がたりにある仁明帝第四宮
人康親王の棲給ひし山階宮の跡なり後に寺となして真慶法印爰
に住職し給ふ四宮河原袖くらべ古より名ありむかしは往来の者と市
立しける所へと云。又道範といふ往古より今これを記して道路
古の茶店の其名をしられて今に通ふ者にありる京と伏見への別れ
道石の標を立て。裏の方に柳緑花紅の文字は残せり
文字抜け
ゆかし山乃道なる諸家を出て相坂の関ぞ逢坂の閑駒引のさしは
をちかたのはなれてかくれたなれも枯木わかく梢の燈
の月げ風さそふゆけるをいで遊子残月


白川橋


三條大橋
祇園新地



ありしむかし逢谷の宿におもひあはせてはむかし蟬丸といひける世捨人
此関のほとりに庵をむすびてはくはしく琵琶を弾きて世を
送りしや浦と云ふを都のくす更るひとの入とあるは風の風にしけしきは青きて
聞えけるあまれ人のいふく蟬丸は延喜第四の宮にてましましけるを逆へに
此世の人かうこと四の宮と名付けるは是人にて

つましらのつ庵はあらわちかすの津へおもむすぶあふ坂の関　光行

追分は是より伏見街道に分れて滑石越といへる行馬あり所々に所あり
牛車を抱く縁物を積みて逢坂をこゆる池の側の針屋に何某とか
媒氣する私して針磨きの名をいふものし一里塚あの算盤なる真の名高し
小車の店大津絵の店あり走井の名水あり又走井の清水蟬
丸宮両園寺むかし此関明の関明神祠清水逢坂をとうち越えれ
たを山ぞ近江の湖をむかふ見ておいて小坂あり所をすぎて大津
八町の駅へつくなり

近江 大津

京師より大津まで三里あまり
草津まで三里半六町

光行紀行

あつまぢむかし天智の帝大和国飛鳥岡本の宮より此滋賀の志賀郡に
都をうつしてましまして大津の宮を造らせ給ひけると聞くにも此わたりは皇居
の旧跡なりしぞかし

さゞ波や大津の宮のあれしより名のみ残れる志賀の古里　光行

此駅は都よりはじめての所なれば旅人馬多く賑ひて豊し
浜通りの方には湖海国より廻せる船多く諸侯の蔵屋鋪もあまたならび入江松
賑ひ都へ大津の町の数九十六町ありあるひは宿屋も多く
今の名所の始めは三井寺関札の建る所よりて三井寺巡礼の札所にして
高観音は近松寺と号して山の上にあり長等山と云ふ此山の峯に
行くまで寺の后あた柿本の長等か皇子の殿舎を後に寺に作りて
御子の方の園城の寺と開き五別所の神祠は新羅社三尾明神

護法善神新宮権現熊野社金堂の傍にあり天智天
武持統三帝降誕の産湯を此水にて汲まゐらせしとぞ
三密灌頂の閼伽とし又慈尊三會の曉依此水をとゞむるより此
名泉にして寒暑に増減なし梵鐘は金堂の前上壇の地に在
高五尺五寸亘四尺五寸厚三寸五分龍頭は高一尺三寸六分天竺祇
園精舎艮の方にかくれ給ふ所の佛藏後龍宮城に入しを延喜の頃
俵藤太秀郷龍の宮よりこれを得てもち来り當寺に寄附し食堂に釈迦
佛を安ス赤栴檀の霊木毘首羯磨天の作也此堂の側に大講堂あり
口の廣四間あり是を唐院と云智證大師の建立寺門草創初の
所也唐の青龍寺を模して中央に智證大師の像左に不動
右に大師の御骨護摩堂三層塔新山王祠宝蔵には大師唐より
将来の寶器多くあり十八神祠は南院にあり燈幢石壇は金堂
の前にありこれは天智帝逆修入定を誹しゝ其罪障を悔しく

伽藍を草建し真言法供養を修しゝの所也経蔵は足利尊氏公一切
經を蔵む同寺の奥書あり又慶長七年毛利輝元唐本の
一切經を寄附せしむ教待和尚の入定窟は金堂の東北にあり教待
和尚は神通延寿の仙術を得て歳一百餘歳にして貞観元年の春
はじめて智證大師に見へて当山を附属し其後石窟に入て隠れ給ふ其
寿一百六十二歳といふ本朝神仙傳にいはく三井寺教待仙人は江州滋賀
郡の人なり百餘歳を歴といへども容顔壮年に似たり常に魚鼈を
好む人其骨魚を出して青白二色の蓮華となる正法寺中にありて
福神石あり又悲田院は此寺の艮にあり琵琶湖の八勝眼下にあ
りて晴天には竹生島朝妻里など遠く見ゆる五別所は近松寺
尾蔵寺微妙寺水観寺常在寺なり安産石は境内八講堂
の上にあり早尾の祠は尾生寺の西にあり山王廿一社の内
なり亀丘名残橋村雲橋夜櫻浄明水二王門北院中院南院

寺であり開基ハ智證大師にして天台宗に修験道を兼る此大師の
廟堂ハ比叡山四明嶽にあり景行天皇五十八年春二月近江國志賀
里に都遷ありし由日本紀に見えたり今志賀の郷内西郡村に
此地に清泉あり極て美水の出して宮居の旧神社併園の古跡
と見ゆる此水の美なるよりおもふに今にても賀茂家よみてし小岩金
小智辨ある吉田小明星水黒谷の雲居ある園山の吉水清水寺に
柔清水其外数々つらね遑あらん浪速ぶし衍城ふ黄金水天全
寺小徳政ある阿ら弥くも古跡ある所とし志賀山越を赤塚寺
登りて小白川より出る滋賀の花園を新在家より所あるべし其
主祠も此里にあり貫之祠ハ正興寺村にあり崇福寺の址
梵釈寺の址なとぞ定めるいへど智光寺の城頭ハ赤塚村の上方
にあり唐崎ハ東し坂本海中より雲神を祀る一ッ松を樟のめぐり五郎拝
高さ三丈枝葉のまろく数て凡百間余四時蒼々として霜雪を

遠く千載常よりも游興る所目なけるも松の影さしにかつ志賀の浦唐崎
名しられ小枝ちるも無残ふし其は龍となりて松をたち禦ぬく
と唫し雅客よりも名る月のさよへと後成卿もよみ給ふ志賀郡を
志賀郡西郡村にあり宝殿御新閣より今竹林の中に清泉あり
これ其頃の遺跡とく

古事記云 若帯日子天皇（成務天皇）坐近淡海之志賀高穴穂宮。治天下也。此天皇娶穂積臣等之祖。建忍山垂根之女。名弟財郎女。生御子和訶奴氣王。一柱故建内宿禰為大臣。定賜大國小國之國造。亦定賜國國之堺。及大縣小縣之縣主也。天皇御年玖拾伍歲。御陵在沙紀之多他那美也。

むかし山科の
道花屋敷れ
跡を
人家建
続れて
今なる
ゆきゝの人
あまた
鶉ふく
只道場也

ひろくは
餅のめいしよ
あれ
里

志賀里（しがのさと） 今ハ滋賀村 南志賀村 北志賀村あり 同所の遺跡を記すべし

新古今 今よりハ志賀の花園まれにだに誰かハとはん春の古里　摂政太政大臣

玉葉 神よりハ花の都に移りきて昔ながらの志賀の古里　常盤井入道前太政大臣

志賀浦（しがのうら） ハやうの[illegible]の浦をいふなるべし

拾遺 けふ返る志賀の浦風いかばかり心のうちにすゞしかるらん　右衛門督公任

後拾遺 みるめこそあふみの海にかたからめ吹だにかよへ志賀の浦風　伊勢大輔

千載 桜さく比良の山風ふくまゝに花になりゆく志賀のうら波　左近中将良経

同 こゝのまで[illegible]志賀の浦は[illegible]　八条前太政大臣

新古今 志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出る有明の月　家隆

同 さゞ波や志賀の唐崎風冴て比良の高嶺に霰ふるなり　法性寺入道前太政大臣

新勅 志賀の浦に[illegible]　前大納言為国

続後撰 いかにして[illegible]志賀のうら風　後京極摂政

同 見てもなを[illegible]志賀の海士の[illegible]　円融院摂政太政大臣

新後撰 志賀の浦の松吹風のさびしさに夕波千鳥立ゐなくなり　権大納言公実

同 [illegible]　伴寺[illegible]

玉葉 志賀の浦[illegible]雲に二上の山[illegible]　従二位為[illegible]

続後拾 あふ坂の山越まで[illegible]志賀の浦波　[illegible]

同 志賀の浦[illegible]志賀の浦波　[illegible]

新千 紅葉散[illegible]志賀の浦波　前大納言為世

同 [illegible]　法印定為

新拾 志賀の海の白波[illegible]志賀の浦[illegible]　家隆

新続古 志賀の浦や[illegible]秋の夜の月　[illegible]

長等山（ながらやま） 大津三井寺なり 委く後に見えたり

玉葉 すむ程ハ長等の山の[illegible]松吹風も[illegible]　[illegible]

新千載 紅葉散る[illegible]長等の山[illegible]志賀の浦波　前中納言[illegible]

大津宮（おほつのみや） 今の大津より四宮の社（しのみやのやしろ）の辺にあり 祭神大明神[illegible]

にあり小松へかゝる松本粟か濱より船出して矢橋浦へ至る一里の渡し
なりこれを左右に見れば左に唐崎の松右に粟津城を見て眺望よ
きは帆かけ舟よりも須臾にして矢橋に着陸地は義仲寺
在朝日将軍義仲の塚○芭蕉翁の塚あり菊か濱より東
今の松本村をいふ石山寺記云むかし宇多天皇石山寺に行幸
し給ふ時近江の国司大伴の某といふもの此濱に行宮を造りて
粟津の菊を栽て御幸供奉の庭に敷て菊の濱といふ文和
の頃より大内裏の御修造の時此地にて瓦を焼調進しけるより今は瓦師
あり膳所領の門を入て左は城下の町ありこゝは本多侯六万石を領せ
城を城といふ湖水へ突出て風景いはん方なし町の内に八大龍神宮左の方
に泉水寺新捨遺言葉に本此下に出迎ふたりてあり○八大龍神
の社あり中庄に膳所明神左の方の濱に陽炎の清水あり
若宮社石田畑の社より中庄に牛頭天王稲荷社あり宮所に

宮八幡宮新羅明神あり都て茲を称五所ありて五ヶの社といふ
然るに今の膳所を粟津といへり杜も此所にある也の名残あり

續拾　関越て粟津の杜のあはれとも清水に見えし影の宿かな　読人しらず

後拾　あふみ路は杜の寸落角に見えぬ程の駒をとゞむる　権僧正静秀

新後拾遺　いさよふ秋の夜ふかく粟津の杜の嵐をも猶まつ人　為家

新續古　粟津のゝ菖蒲の末の隔てゝ有明の月の影の今ハ　正三位頼資

新拾　相坂の関こえくる秋風にあはれ嵐もふかき契りもあり　権大納言公蔭

あはれ此ふくへ分つてよみ侍る

新勅　東路の此の見粟津の露と消けりもとより神と定めし　権中納言定家

舊膳所といふ地名あり是新社なりて山王祭の前七日の間は五ヶ所の内
頭屋を立て其家に祇園の幕を張りて此家人は十分一の初穂を
父方あれともし道心ある山門の九十九浦の初穂十分一と神
供料として是を支配する粟津膳所世義陽炳の両人に受領

粟津社の神供を四十九膳調へ例祭の日音楽献ずして奏し神供を
唐崎の沖にて供す古例其古儀文天福元年四月二日より右之将兵部
なりて渡さるゝと哉今は山門の古例も廃して膳所の町より此を
の老人に従の初穂を受て神供料とすることゝ
田畑の中にあり陽を濫觴あり これを五音源君の祠とす 膳所の町尾
の浜にあり 山王権現の日本へ渡りたまふと御食献ぜらるゝ陰膳浦にて
即此地なるをむかし鮮魚を日次に貢せし由古書に見えたり

夫木

吹わたる比良の山風寒くとも日次の浦は[illegible]　懐人名つけ

国分寺の古跡は今の別保の薬師堂なるべし
幻住庵は粟津原の南芭蕉翁の遺跡なり元禄三年の夏しばし
住ひ自筆をもて深あひし経石折々あり出るものか古跡 此西
翁の遺跡なるべし ひとへに清水あり幻住庵の記は鴨長明方
丈記にならひて書かれし此庵の古跡は近八幡宮の清地として

今もなを旅せる来勝の地なり
漁のかの椎の本もあり夏本立　またき
並平坂より粟津の原へ入る所半町許にあり
鳥井川又八御霊社あり大友皇子を祀るとなり
是より紀東石山寺に至る又粟田谷を過て東寺十町許
より石山寺の麓なる門に入る此地は源家行跡の寺なり背面
に仁治元年十月十三日従三位藤原頼経書之とあり本
当寺二躰如意輪観音長六尺聖徳太子此御作これを腹内におさめて
良弁僧正丈六の像を今の本尊なれ脇士は左執金剛
神本金剛蔵王二十八部衆春日不動明王円陣に安置五大尊
舎利弘法大師利益名号あり八重葉を幸ある御厨子にある源
氏間をむかし寛弘の頃紫式部当寺に参籠せられ源氏物語を
書始めし所にして硯石なり源氏の間の霊宝とぞ式部の石像ありて

源氏物語を書かしむる硯に牛王經の離物あり海二ツありて濃
淡の差別しるしとかや大般若經あり式部か自筆也三十八間社は南山
の鎮守なり法華の十羅刹女に千手の二十八部衆を祭る神なり
紫式部墓二層塔は紀の建久の頃秋篠卿の建立し給ふ之本なる
多宝塔は大日如来四隅の柱には三十七尊の画像あり丹青妙善を極む
芭蕉庵子芭蕉翁を造る遺筆勧化して一切經を写させ納める
經蔵観音堂は本堂の東にあり又鐘楼亭より湖上の絶景
ある勢田橋の辺へ眼下にありて清覧よき所なりて鐘楼は中
壇の跡にあり此鐘は銘文より何かありしかと石山記に御影堂は
中央に弘法大師左に良弁僧正右に内供淳祐法師と八祖の画像
あり八宗経は御影堂の前にあり開山良弁南都より来りて本尊を
据ゑる力なく柳の枝を植え給ふ秘経本尊比良明神之に出現ありしと
なり又あるもの毘沙門堂は人々至り食堂より下壇の跡に

あり聖徳太子堂は安置比良明神社は西にあり食堂の南にあり經蔵
権現は當山の鎮守なり蔵王権現の別社なり経如牟尼下壇の跡に
あり水源は本堂の下にありて流れ出て此の流れをあつめて天狗
杉は山の上にあり柳の汚も並べ暦の比本堂回禄の時天狗
飛出て出給ひ柳の枝にかけ置けるとぞ天狗の宅なり牟尼の奥
三所権現あり此の上に聖天堂あり寂寞たる所なり實に塵
外の佳境なりけれど暑く又も比日陰を覧る洞ありて早魃の時
清水を湛へて此石に塵缶石は此洞に由る
石上にて乳権現を漢補しと給ふ蔵王堂の下に井あり洞心洞中
より来出現しけれ和尚を殺す事しけれ其年義平を斬る其魂二所
権現奥の山にありて此の蓋しと悪源太義平之の中し被り難波六郎経房が捕
て六波羅に引く時に六条平治物語によりこの事に由り
石山寺を築くとなり小屋を作り此の蓋しに由り義平を書きて

勅しけるを我行履岡の当山の燃灯に伝法習をうけに遂しこく
昇天し給ふてあんれ祢当山を天智帝はじめ天は宮に立せし時
慶雲の佳瑞をうけ聖跡を示しぬ時の帝の御伽藍の御誓願持ち
らん其後聖武天皇良弁僧正に詔給ひて八葉の巌上に伽藍を
営み万代の宝祚を護て勅封を添し給ひしよりなり

石山紀行　　　　称名院公條公　西三條

去年の秋乃比源氏物語の事ちぎりあれがたき物がたりして八月
十五日石山寺にこもりて式部が筆のあとをみしより昔の事式部がうつ
かりける人々あきらか通ひてみし二月も見しもゆかし
中て既に祈りつゝ像の法楽の名号を上手とて
十五首乃歌を詠じ侍りしかどもさる事ありて其まゝにし過
侍る此事を金石きゝて先しはかくはまた縁あり人数
よしかりの和来此をのがれに宗祇遠方にも身を押へし

納して續中一部の功をとげむとおもひて又宗祇法師
紹巴法師まで同趣の歌をそれぞれ給ひよこさせたりしを
とりどりあつめて彼の源氏の間に始まり十百韻連歌
あそばせしは不堪ながら老懐いかで此舞ひめぐらし巻の尾に
書くべきよし仰せしかばさては発句の題もその折々のおもむき巻
目録をとりて若菜の発句など出し侍りしは其のおくその心
或折りひがし十帖発句を清書して奉りし天文廿四年八月十
四日に祈りの句も書きそへ侍る十種の香などを奉るよし此次
侍る人数粟田山うちこえ走坂ちかき頃は侍る相坂乃
関をこえうちいでの浜など過ぎ勢田のわたりを見あげ
石山寺よりつゞけて法楽の会にかへりてその比をさそひ侍る
てりきたる宿坊など入りて十ヶ日もありて玉楽州
物がたりまで家中此月より数へきよしにて来侍りて

かの源氏の間にて筆をとりて書かれしこの坊のさまなるは世尊院
よりて書を納め奉る坊ありて清めて見へ侍りしに
あまたの法もしくは夜すがら読誦せしとぞ海山を一目に見下す所なれ
いかにして又翁は何事をも記し侍れる月の忘れかた
かゆる秋の名残と称したる智子は勝母の里に車をかへさし浅香祖
柏人までとはんとてこの浦に住みけるかの貫之が歌の
名所なれかくれ出でもあらはれて見侍るに東に園山あり
眼下に湖水を見れば浅からず清浄なり
又一休老師江山一覧と題せし墨跡も此所にありて
墨客の此坊に掛る幾重の月を見し山風ぞ吹
一連寺此金峯も此坊と号せり侍人の記す所なり
めぐり四美備はりて風景いふも更なり此須磨の浦の
名の金峯此須磨風景として見るに勝りて幸ある

これを此四人の作をしるし南山乃総をたてて蔵す
則経堂の奥つきを金龍の清きとして奉納し
ある時此坊より詩歌を催して七夕の十五首
よみけるに二百首の和歌を五日にて執筆
理文の業を今も人ぞしる人々これを秘蔵して
その月のちの年をしたふ清光浄にて薩埵の光明
をうつしける見えし時は一月遷宮あり
世尊院にて百韻の連歌あり此月舟して還向し侍る
にも海の浦の舟よりかへるに風の音もよそに
して光もうつれる盛者必衰の理をしる
歳しみて
詠十六首和歌
南無如意輪観世音菩薩の上にのせて

大津
小舟へ
あつまた
石場の
渡口を
あげまする
伊勢まゐり
その
舟の
こぞろさま
近所の
縁ひ
うるべし
屋

矢走の舟
嫁と娘よ
妻の風
圭祇

なひきわたる雲の衣をうつ見てて一条のとをの妹乃ちさ浮風
むらしらぬ法の水あつらんは木枯いやあ河しれぬ浪のわ
にうつる鳥あきらけもあつつまのうつ浪乃や浪華らん
夜られをはられたるらぬ松乃みかりひさ清さを松虫の啼
いらま絹之月かしよて光る妹の衣を分すさめる衣まれ恋もしみ
すんきむとも見し露を結れするまにさし入月のうけの多面すさ
むら雨れおら遠き月の掛りひとや露ようちりすまれ露しうせ
くさも空き花月れてある木枯鏡山れてさく分中をすわきや
そ衣うつてらふる都る雨まくさ引むる今宵も厥屋よちはまいり
すらすやさつの守り引駒乃河てに雲路のあきさうのやま
せ花のねるさの八道や浦より鏡山より楽出てさしうつ衣
母乃花ある人乃志いさとよ浪をかきて旅の衣飛まえつらん
ひとを昔の恋するれ衣の上つゆさしられも秋の弥にすく寂

植木出る河しらり也妹の袖さられる雲にしら乱綿うてる
けさらふ手を分つたる年月や旅身の老木あれ風の床
つまくさいやうの木に花を分く紅も中々やの秋と越らん
此おもを得絵して金屋剛着あり
長秋も君のよと我掛り風まつ浦てらもそしても冷宵
むらさ花の道よりつく霧をも山きつつゆられとるす芭人の旅
氷湖の海やうちひの月れをらや妹の宿中秋守ふし浦鏡ん
母のかくとりらあらてきく秋をすまかられをなにとさ秋津に
いかよ人の妹やうかの流水のうる秋の末まをうれ空を包
つまられ花殿秋の空のとおりのを露かるや衣をかし
想さ五人松も流れすそのうすに露をもしられ仕濡れて花
名海をうくあえ人の空想の扱ひ人の月やうんてや舞
ほ中流世書方れ花の名の山や志るる人来にも人あのなる

烏羽玉の夢も花もこのむなしきわれ／＼枕を枕とし秋ふかく
せはしさめてうち見ればまだ月は残りうつろふ人の筆にしたがひ
吉田山の峰より立つ波のうちに出の浅きとゆく水の流れ風
むかしけつる身をとらまくもせめ見んそれもはや過ぎにしはかなき
煩悩の菩提となりてあはれ見つめけりのうき月の山の雲
されば心ある秋の夜の月に千とせを契りしそれもむなしき扳のやみ
はるかなる御法の声にさめ待つ暁の霜も窓に露吹く嵐

石山箱之記　　長頭丸

ことしの冬の秋石山寺は瀬戸ひとつの道路ふして京ゐなかの人
をさそひてうちつれてみかきよりかく待ちとさそひて出て井のもとに
ともなひてそのうちにおもむきしこともえそのきはを
かさ嶋より出侍るも身中の音ある時も身をさそひて
たち出たることきく比山の端ちかくなりぬれど出たるむかしの風をさそ

こゝろよくなりしのすゑにかへりてをきたる枕にもよくあけ
わたりやるの心をさきにみち関のうちにひきいでけるもちのかへ
ておもふありてかへるて浦をおもひすまのる
ふるき都のうちわたりのゆふ山の山のかよひぢにて
あをかるゝ人のまへる舟を浦にるのぼるうしをもとせ
あまたの舟と見てねがふれなりけりもたちよりて
ことさまにてはるかに入ればこのうちにてのかりのゆかりて
わかれてやゆくちぢに見ゆる人とゆきのぼるうしろの
わかれやの打ちらし橋の下にわたりて見ればゆくへもしらず
さがらしの音して中ほどにふりたちて沸水に浮く風雲に浪のあはれを
従是より子ともに宿とすゝけわたりてはなれたる見どころの下に
これより石山へまたく一すぢの道のたえたるにあはれなるの
東のかたに向ひてあはれにてゆくへのまへのあはれに申し

圳ふ通ぜんさわあらぬ人の中に交りもせざるをもとよみなる書に
はなれてかくらしして結びつくれ年経ぬるあへるみちふたかひの姝く
よるくはかくされくの侍るよし伸ねしぬれこそたくましきる城
見てはきくいられよあまたく山の名を越えしにし見ぬ人さ古の跡
は御佛を拝しなる人と主の跡をゆくふ葉れと立ちぬし
秀頼公は御母堂乃くの世後のぬし代り申ひのこゝろにて
かへてはてしくせんを越ゑむりしお月出る月のなれ
のひかりあはさるをいとたかしうし拵る山のくれ乃ひわ
海をみれなぜなるの七種も月の光を見るを此山雲稲ちくたび
ぬし帝よたかきくふ舟をはなすれなりやたのしみゆきふ六やに
のゆくし舟にやあり人ひくりしまあり南にさしすきをかまきこと
小寺けりしれは中枝はねのかしかふろもくれをいつせよりでよひ
まつすのはさへしすはあしくれぞうらはいふべしてるを頼

の物語も世にありけりおもひさちて書をあつめりし安々と侍れは
侍を世を云の中迄侍るもいずまとも寸すゝきれ人へりもまされはよろこひとあわ
まよろし此事はまのふてもむかしてたるをよめてゆ中の都をふみの長給ふ
筆にゝさまて此秋の夜乃月はよるあるの筆は事にて山を
いつの世よりもいはゆの世までよみて侍るを長くはれしけるをさまて
侍る事のみ人をされらつりしを手て名のそゆきうなるをまき
あすけれしむりし事を書もしはれ事も源氏の間とゆふ所あらさはされ
人のさし其をもいへまし和するを出しもの古今も事けりの古侍のむもた
よ之武鉛しらえりしらむ此事のよまの歌あれは歌もつてしてたす
すわかつると歌ありしふわきたゝふ三人さかなゐすかられこゝ人もおき
なれかかゝるゝるもる侍よむりてはらく紙ありえく出往侍る
うちのもの祝の石山や世けんふみをきる此の筆の殊に　貞徳
あらしするかおしみれを残そくのもかえにてきさえたるへくたな迄は中をかえ給

石山即事　　長頭丸

秋風誘我石山行今日吹晴湖水平比叡峯高懐寺古勢多橋隼見虹横

石山紀行　　澤菴和尚

有故人従故國来十年不語亦親哉洛中相伴幸佳境闌外勝置自是催坐出紫園向洛東第三橋水更無窮粟田口外数村末逢坂留名関古宮蟬丸曽引琵琶殘澗水松風五月寒聞寺跡荒留礎石小町今亡涙欄干太陽停午大津津此処即是打出濱風収雨細水無浪萬境清湖一色新

大江之南淡津森常聞悲風怒濤音弔古戦場思舊記華平家後猶若今渡景山田矢走舟長橋臥浪勢多流遥遠村路有層塔此夕借房投宿留

○

此處即是石山也本尊者二臂観音也見此山致境漫々湖水在前洗肉眼峨々岩石在後轉塵心溪水説法山風談空可謂上求菩提下化衆生矣往古者湖水窮而無下流故今之観音堂者古湖水汀也怒濤顕山骨如大洋海岸勢奇石怪巖難盡詞船繋岩釣磯于今儼然寺僧語之鐘聲頻催暮帰宿房吉祥院同宿者如玄南都玄齋兩翁也院主茶菓點侍叮嚀也山之

縁起靈寶無所發披閲夜將過初更五月八日之在
半天微雲遮之雖然菩薩之慈月明々物外而衆被
群昏誠不聽仰之卒賦小偈

歸命石山觀世音補陀刹界別何尋縦然天上被雲
覆菩薩清涼慈月隆

◯

翌朝又伴院主入堂開紫式部閑居源氏間則上
間掛式部之遺像本堂雖近年再興源氏間者古
楹猶存以是為證云云聞說式部上此山則源氏
六十帖浮漫々湖水上矣此證實不虚院主師弟
携酒數刻有興玄齋法樂之音曲一聲皆人歌聽
雖興未盡各下山又向舊路歸矣越不可無小詩
叨信口云

光源氏物語始斯山式部遺名満世間渡夢浮橋
継帰去一輪明月照湖閑
下略
西三條公條卿図陀摩沢庵和尚その古九丈をよみて中の道にゆる
あり痛茶師を招しむせ給ふ幻住庵の其國分寺にいたる並樓閣唯
の風隆なりらくらくの清水経塚を見わたし勢多橋にわたり小橋長
二十三間大橋長九十六間寓構慈宝珠銘に造豁安に其年号を
鐫む一名青柳橋勢田長橋あるいは唐橋ともよばれてのちにしも
よりの秀郷祠竜神祠は東橋の北にあり雲住寺これは守る田上
不動尊は田上川の水源高峯にあり其神山と号ん境内を跡
新羅は縣後三の其邦は田上にあり猿丸大夫の墓ハ此奥の
方曽束にあり勢田の町長し茶店旅舎なり建部明神の廟ある
祭神大巳貴命なり例祭は四月中午日此地の生土神なり

夫木
あけぼのゝ空にあまりて勢田のなかはしうちわたしつゝ行人も有
こぎいでてみづうみはるかにあかしくれて行の満艘を眺むれば比叡山より
おろす嵐その舟をみてよ紀の国人の家おもひのほかに行くすゑも
こゝろぼそくやならむ勢多の路のしら浪はてもなく遠くなりまさりて似たる
はかなし　讀人しらず
堂の香すりして勢田の町を過ぎ此所の名産に蜆あり
あつかひて勢田より奥の上流にて漁するよし味池郷に傳ふる
よく煮て能く食ふべし柔なれ蜆も赤あかく味ひよしこれより三間茶
屋砂川の北に大石村なりされば大萱新田を越ゆ里の
勇ま月輪の池あり清く濁り池弁天池月輪新田大萱茶屋
は萬里村より野路の篠原なる取さに玉川の跡ありこれなり玉
川の真一なり

新続古　さかえ行むかしの月のかげも見む秋の夕ぐれ月も照り行く野路の玉川
太宰権帥　仲光

しのはらといふ所を見れは西東へはるかに長き堤あり北には
里人すみかをしめ南には池のおもて遠く見えわたる向ひの汀
みとりふかき松のこずゑ波の色もひとつに見えて南山のかげ
をひたさねとも青くしてくわうやうたりすさきところ〳〵
に入ちがひて芦かつみなど生わたれる中にをし鴨のうち
むれてとびちがふさま面白く見ゆ都をたつ旅人の
しゆくにとまりけるが今はうちすぎぬるたびびとばかりにて
家居なども立つゞき盛りなりしが今はきくどころなく世のならひあ
すか川の瀬ともなりぬるとかや

按るに篠原を里と御上郡あれども今いふ野路の篠原
野路の篠原なり新宮明神の中務十禅寺川矢倉の
町などいふところ〳〵もすぎて名所なりゆくほど人もたえて立
よりは野路より矢橋のわたし口まで廿丁所々矢走不難岸八幡宮

草津 近江

やく廟し給ふ祭神は應神天皇左は神功皇后右は
武内大臣天武帝の御宇白鳳四年二月十一日大中臣清麿勅を
うけてこれを勧請し其後建久元年右大将頼朝卿上洛の
時馬上より額をあけらる此の廟し給ふといふ事より尊崇し給ふ
の兎角の此村社檀再興にあつかりて其故に天倉にて戦死多く
奠なり
守山まで一里半此駅東海道木曽路街道尾張道追分なり
にあるを駅し宿中に立木明神の廟し給ふ上品寺駒井氏
が活人石あり見あるべし
東仙道東海道別れ宿端れに石標あり右へ曲れば東海道右
郡の駅に出る直道なり東山道木曽路なり是まで東海道
名所図会にあらしを出しければ貝原氏の木曽路之記に所なる
の遺補遺してここに挿みて

草津川 常は水なく橋あり霖雨出水のをりは舟わたし也其水上は
信楽より流れ金勝谷より流れ来る山田にて湖水に入
草津の駅より針か家にて道を左に入て梅木井村出川むかう
是斎といふ店あり和中散を売るなりさて川村を過て綣村に社有

大宝天王社 祭神 素盞烏尊 大宝年中疫病ありし時こゝに降臨
し給ふ社内の杉の木に出現し給ふ二十余村の生土神とす例祭四月
十二日生土子廿中五ヶ村より鎮を催し神前にて鎮花あり其の
頭大宝天王宮本社南向側に若宮十禅師祠稲荷社三重塔
能狗さ所もあり又此辺に閻魔堂村に閻魔の像あり小野篁の作也
又今宿村に立はの橋といふあり是は栗太郡野洲郡の堺也
武佐まで三里半南宿の入口に守山寺山門あり橋本に称名
寺といふ高田派頂寺末のちなり蓮如上人建立の余を許
此所に移しけるといふ守山古歌に詠ん

近江 守山

古今
しらつゆも時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり　貫之
嘉応元年高倉院御大嘗会悠紀方の
神あそびの哥近江国守山をよめる

千載
皇を千代万代の神まつるみ守山の名をこそきけ　宮内卿永範

新古今
をとこ山をくらの山のもる山のなくしもなるもる山のかつらせり　式部大輔資業

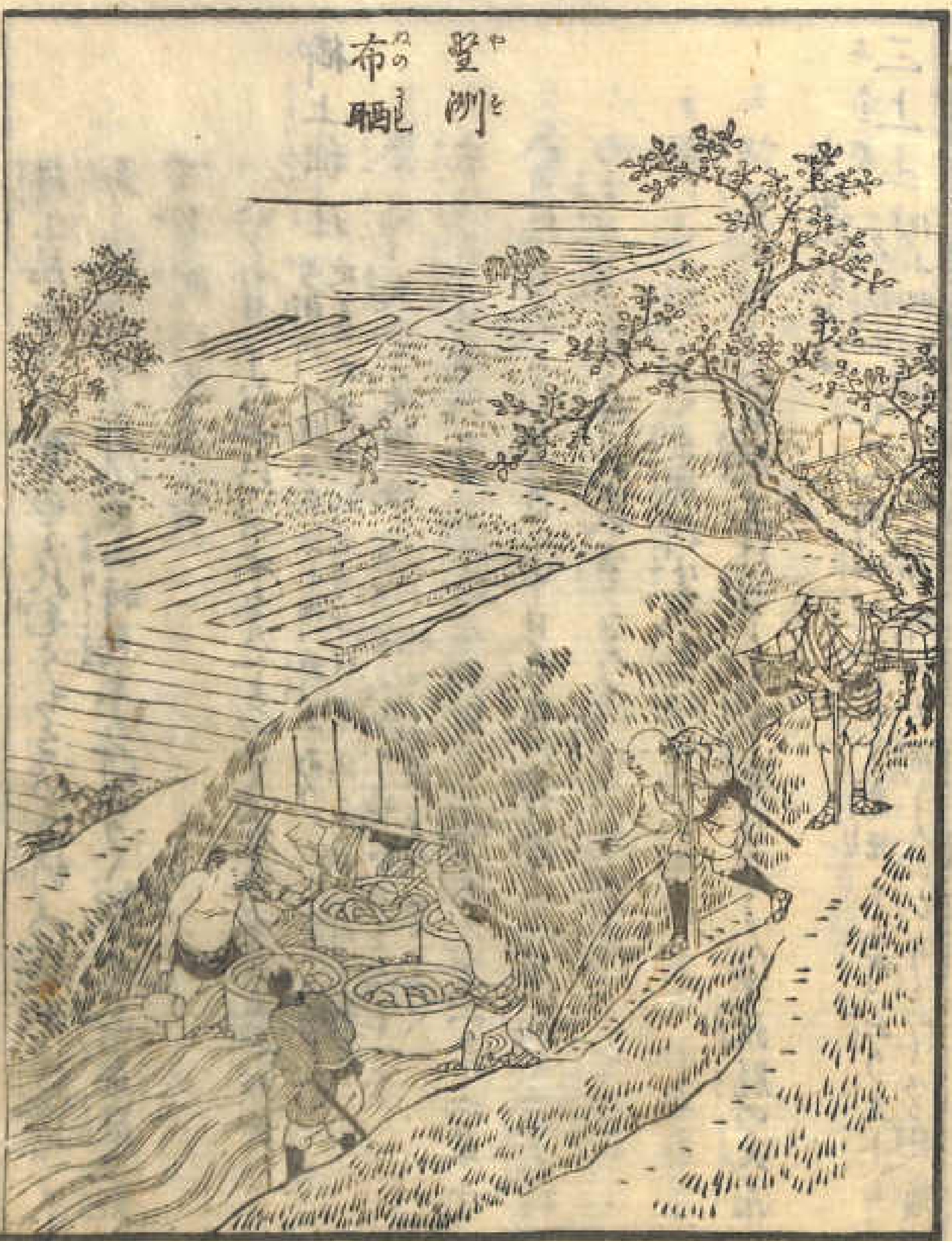
続古
この頃の月を秋にてもる山のしたもみぢしの風　春宮権亮雅経

玉葉
守山の峯のもみぢを数ならでわけ行人に色のこしこそ　貫之

新続古今
人しれず下に思ひのもえぬるはもる山の露に染めぬらん　後久我太政大臣

夫木
時雨の涙もなくもる山のうつるものゝ紅葉哉　為相

守山観音堂 右駅中にあり天台宗にして東門院守山寺と号す
本尊 千手観音 十一面観音 両像共に安置す近江の旧跡
桓武天皇勅願にして田村将軍是を建立す當山初は古寺にして
本堂の側に田村将軍不動堂あり鐘楼天満宮勧請し惣門に
二王を安じ傍に鎮守堂あり



帆柱観音 石部駅中にあり天台宗にして慈眼寺と號す
本尊ハ十一面観音長弐尺許むかし傳教大師入唐し帰朝の時
逆風舩を驚かし忽帆柱折れたり時に大師十一面観世音に念
じ難風静ならん事を祈誓し給へハ速に風波穏になりて帰路
恙なく帰朝有其帆柱をもつて大悲の像を彫してこゝに安しぬとぞ

野洲川 東海道横田川の下流也水源ハ河水をさき入く

新勅 香るあみをもれてけと同しうちてやのやすの河波 従三位頼政

玉葉 旅人もみなもろともにあさたつるかけてそわたるやすの川橋 安嘉門院四条

新拾 わか恋はやすの川せの水よりもしきりにかゝる袖の涙か 従三位頼政

夫木 早苗とる田中の森のかけしめて野洲の川田へさなへとりうゑ 慈円

海道記 田中をもちて民室打過けるに野洲川の岸に立ちて見れは
うちわたす旅人のゆききしけくして早苗うちもの畑の
面をすきて林の中に霞む小社をゆきかてぬ小河を渡りて

揚ふ風たちて鷺のこゑもうちさわぐ所の編戸ハ垣根ふ
多礼花咲すさびて山時鳥きなけバかくて三上の嶽を眺
て野洲川をわたれバ

いざおりすむやす川の水きよくよてさゝなみくらしきやあれ

御上神社

野洲川の堤乃西六七町計ふあり 延喜式内名神大月次新嘗 俗名三上村と書ん

祭神 天児屋根命 左若宮 天細女神 神殿を號る 右十禅師 大寶 各拝殿を祀く

末社竈殿楼門あり当社ハ太むかし孝霊天皇六年六月十
八日鎮座御祭ハ四月二の申日舞宮の神事八九月ハ四日ハ三上村
の生土神ふして神武厳重なり御社乃林園広くして森然たり
絵の春ハ粉しく来現利生の垂跡ありさゝかはらて一山蕭然
護憐ふかくしら紙願も甚はなきより霊応あらたなり人をしも跡勝の處也
も思ひれなる

三上山

一名ハ杖山ともいふ 神社の上ふあり 登路十八町 山より五十町
俵ふ照虹山ともいふ 秀郷の山 緒よりひなかしかる絶嶺

拾遺　ふ八大龍王の祠あり毎歳六月十八日龍王ゆゑしとて遠近来て登山ん
ちはやぶる三上の山の榊葉ハさかえぞまさる万代までふ　よみ人しらず
山中あり榊を名木とする

同　よろづ代を三上の山のひゞくにはやすの河水すみぞあひにける　元輔

千載　ときはなる三上の山の杉むらや八百万代のしるしなりけり　藤原家経

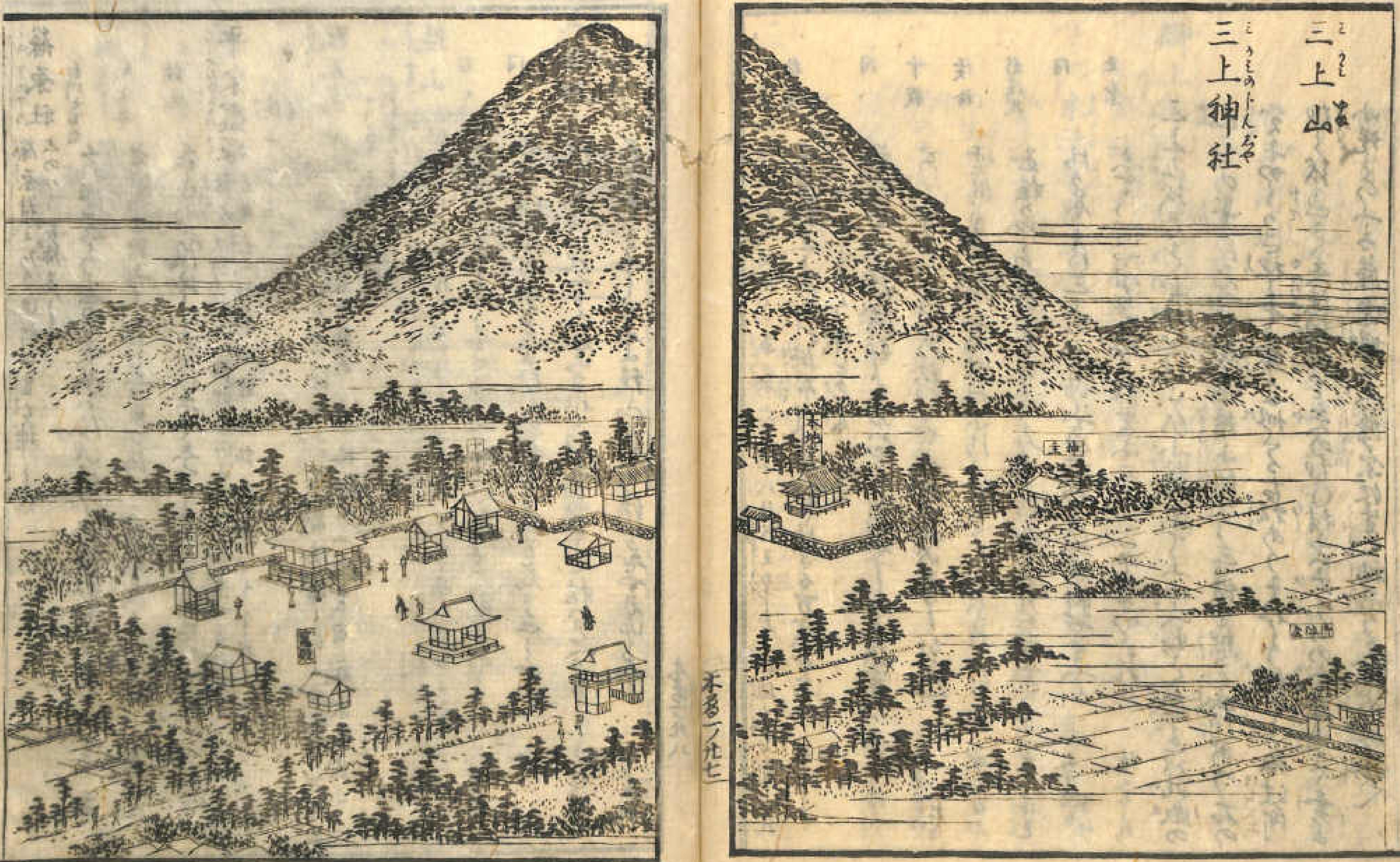
後拾遺　雲晴るゝみかみの山の秋風にさゞ波とほくいづる月かげ　中納言経信

新後撰　玉椿かはらぬ色をためしにてみかみの山ぞ千代もひさしき　式部少輔長光

同　ゆくすゑも三上の山のまつかげにすむ玉の村やさかえん　前中納言為兼

玉葉　近江の浦や波路はるかにみかみの山をぞかへり見すれ　後入道

三上山松見よく耽經を持ちふ小篠原まで中へ出て顔を見る池敷の
山三つの峯ハ見えて富士の形に似たり三つ坂を越て野洲川あり右の
方に見ゆるハ三松ありて其下に桜の名所あり辻所
むかし俵藤太秀郷の其の村ふ大むかでの住処あり
小篠原より大篠原堤へ大篠原ハ生土神あり又犠の名ある



三上山
三上神社

篠原社

篠原社（しのはらのやしろ） 篠原村にあり。此村の生土神とぞ

白河七百首 しのはら古歌多し

をれぬるそらの雲や篠原ふたゝひ行人の袖かへるかな　為家

新古今

世中はうきふししけし篠原や旅にしあれは妹夢にみゆ　俊成

続古

衣手に嵐寒しも篠原や夜半に霜置宿かりしつく　信実

平宗盛塚

平宗盛塚（たひらのむねもりのつか） 篠原社の北にあり。西海にて捕れ宗盛父子八幡の合戦に捕られ都へ引上せ給ふ時此所にて首を刎られしを勅定に依て墓を築き祭らしむ

蛙不鳴池

蛙不鳴池（かはづなかずのいけ） 篠原村にあり。此池は宗盛首洗池といふ。世俗是を蛙鳴かずの池といふ。宗盛の首あらひし池とて、其頃より此池の蛙鳴かずといひつたふ

鏡山

鏡山（かゞみやま） 鏡村にあり。此山は古の歌人の読給ふ名所なり。山麓に天日槍の像を祭る鏡の宮あり

古今

鏡山いさ立よりて見てゆかん年へぬる身は老やしぬると　大伴黒主

同

あふみのや鏡の山をたてたれはかねてそ見ゆる君か千とせは　仝

後拾

鏡山やまかきくもりしくるれと紅葉あかくそ秋は見えける　素性法師

拾遺

花の色をうつしとゝめよ鏡山春より後の影や見ゆると　坂上是則

金葉　かゝみ山峯より出る月なれは曇る夜もなき影をこそ見れ

新勅　大嶽の峯吹風に霧はれて鏡の山に月そくもりなき　兼盛

新後拾　くもりなき神の宝に照そへて鏡の山に出る端の月　法眼源承

続千載　鏡山見ても来ぬ物は行末の…　二条院讃岐

同　わか君の千世のかけをも鏡山立よる人の明らけきなみ

風雅　岩戸あけし八咫の鏡の山のはにやとりて照す月の影かな　正三位隆教

新拾　曇りなき御代の初めに…鏡の山のかけに帰すかな　為家

新後拾　鏡山今そしる秋の月なれはひかりくまなき影のうらなみ　光明峰寺摂政家

夫木　時雨ふる…山のもみちは…　権律師…

光明峰寺　かゝみ山うつしに…此寺…

てよみける寺は…にあり…

さゝ浪や…

かちよりて名ある通る人のみ山を左にしてここを…

鏡宿（かゞみのしゆく）守山より二里…武佐へ一里半…

牛若丸投宿家（うしわかまるとうしゆくのいへ）鏡宿にあり…牛若丸…此家に宿して…

長者（ちやうじや）…鏡の宿の長者…若光寺川の…

長者の名を…一本…

今…ありとそ…

是より鏡宿を過て若光寺川を渡りて西横関村へ出る…

水口への道あり西横関むかふに八幡宮の森あり横関川を…

わたり東横関にいたり馬渕村に至る

十蘭坊（じふらんばう）…

安楽坊の跡…

馬渕縄手の双樹の松原二十町許ありて長光寺村に

武佐寺 一説長光寺村にあり 一説長光寺といふ

かゞみ山かしれ山際に武佐寺なり

本尊千手観音上宮太子の持念仏なり寺の霊石宵女尾石といふ又八天狗の香木なり当寺むかし武川綱といふ者これを創るに故に武佐寺といふ平家没落の時平重衡東下のときに此寺に過て平源平盛衰記に見へたり

愛知川 此所で武里半これより西の方へ通って八幡の町へ行道法五十町許あり

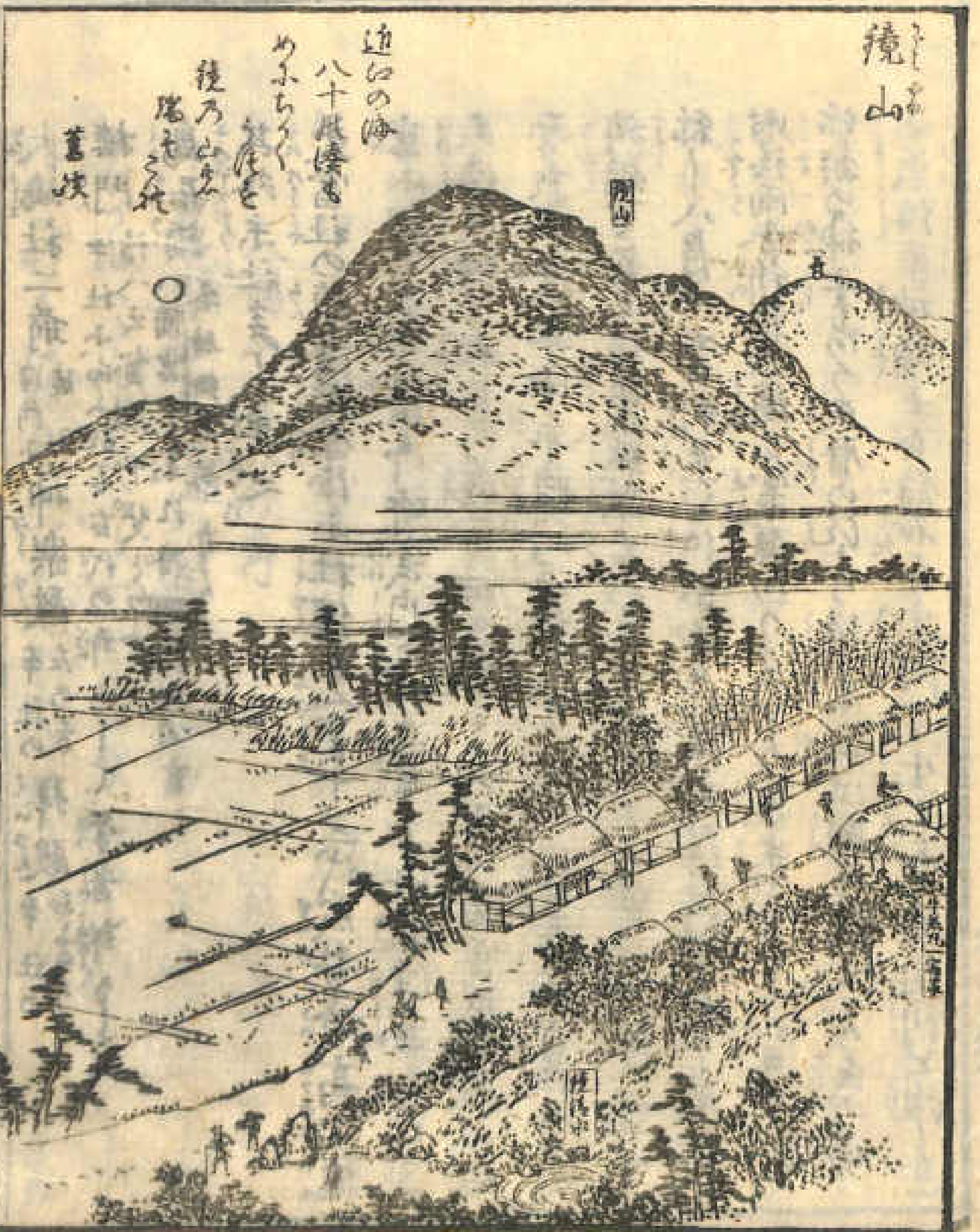
（近江 武佐）

八幡 此辺の町舎は地として商人多し産物は蚊帳地及び布海苔畳表園茫蛇心薬藕箸なり

比牟禮社 神名帳 大嶋神社 云 八幡庄津嶋にあり 延喜式

本社中央 応神天皇 左 神功皇后 右 田心姫神 市杵嶋姫神 此三神を玉依姫と称す

天照太神社 本社の右にあり 稲荷社 本社の左にあり 若宮 羽州に



大嶋社二前 摂社 本社の左の方 神楽殿 本社の右の方 拝殿 本社の前にあり

楼門 傳に云古代の額にして筆者詳ならず

鳥居額 八幡宮と書れ持明院基時卿の筆なり 大納言

其外末社多し略之

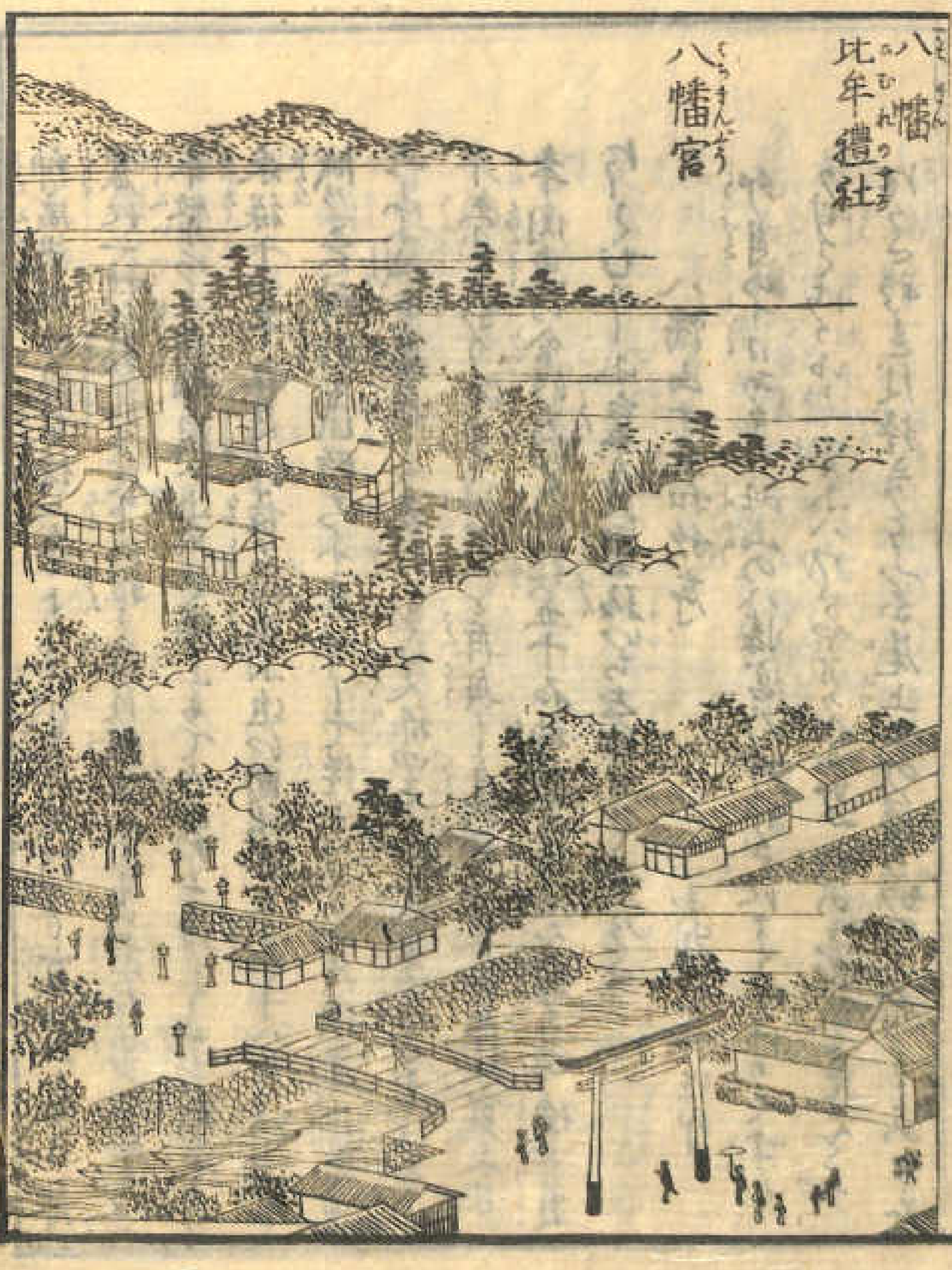
夫当社の鎮座を原ぬるに社傳に云人皇十三代成務帝高穴穂宮にましまして即位の御時武内大臣に命じて此瀛津嶋に勅して大帯姫神を祀らしむ厥后神功皇后の御形のまゝ八幡宮と崇め奉れ天慶年中平将門追討の時六孫王経基公奉幣ありて祈願をこめられ直に賊徒をほろぼし周旋山上に移し大振八幡宮と称し八月十五日例祭を行ふ後にぞ陽成院の御宇天下旱魃の時祈雨を祈らるに速に霊應ありこれより毎歳三月十五日湯立て旅餅の神事あり天暦の頃より佐々木家此國を領せるより氏の神と崇信し神領五百余石を寄附し生土三十余箇村を領し

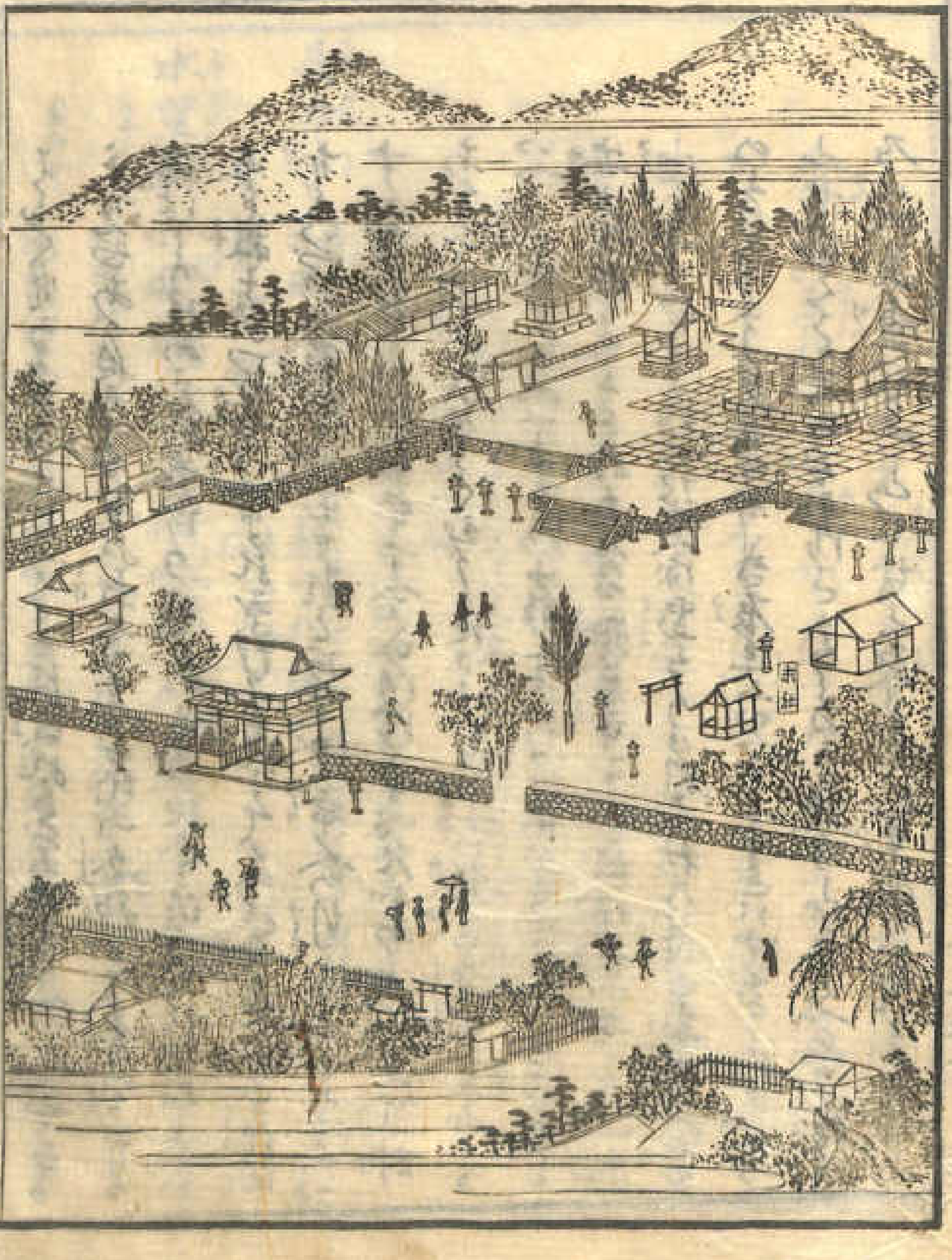
神威光輝きたり長徳三年より放生會を行ひ寛弘二年五月禁に一社に勅許して下の社と称し弘安中より崇右を賜ひ奉幣ある恐神風に追れて海上にて亡びるを拝して霜雪あり永禄十一年九月信長公の為に近江国悉く本家十八箇所一度に滅亡まて神社も此時大に衰弊して後に御寄附あり其頃豊臣秀次此山に城を築かれしが程なく文禄四年に亡び慶長五年に至る平かなりしより神殿を再興し高殿をも立其後寛永廿一年関東の命により神領五十石神職の除地を賜ひ神像も厳にしてもしに霊験いちじるく崇め覚ゆる

八幡山十景和歌序　中村孝吟法印

卯月の十日あまり此山の八幡宮の神わざにまうでゝ帰りてゆくさきにうけくるゆく里にいでゝやすらふほど神の志るしを見てゝ夕ぐさ影さし峰高く尾上よりの見わたしの景いとめでたし

八幡比牟禮社
八幡宮





もろくはるかに見わたされふりてみれば表れあるもありへのあちこち
さ日名あつまる寺さは[illegible]ふやさしきもの名妙にて書のこしける
鴻はしの比あさましきちかひなるにき今ひとつたゝねとみえ
なも数ちひつて蓄乃世にれ[illegible]しのかれてあれは両岸ここ花園
なるいづれの家にも深出ぞれと石中もなる人のおりひ海士の許なき
すゝむ色もまたくされ数にほすべきにほはうすつれにまあるの律の斗計
あおむしてつひひらくをつしにさしむつ[illegible]記も寺夜も立山よも
いづれ三十三所の一として[illegible]人を[illegible]さまとにしへまつる出て
安土の山ちかくそこ形わるる惣見寺こそ昔信長の御城の遠景
山下清く晴るゝほせのたま人湖嶺らうなれと杖乃月の表をもちなる
のうれあまつり見せける月さ居るにの見るゝまるさ出つる世あらもにしこ上の
山巻のえく本の写にはさかるると鏡乃山もらんをみの庫去
乃八の美景にその山くなさへて十比景あまねくといふそかたぐよ

見え渡さんよしあり其衣笠も都の小山よりの花豊浦も根乃
景勝れ東にある名ある所をも此国の[illegible]ありなどの上
の[illegible]年に隔れぬる花寺秋のよすはいろくやまかと寺
みはよみいでゝたんとたかき飛花れぞそれまでを夕べのもむ
かすど志かるくすまゆせぬなれをすへろく
為りける十万の[illegible]の八幡宮乃神を信仰して
世をうけて佐の甲に八まん山ぞなる非の志に拵なる　季吟
十景のうち八幡晩鐘

寺名ト
長命寺
長命寺山中九の上にあり八幡より五十町許
西国巡礼三十一番の札所なり
〈相ふ参るは当所のひとつ名神まうでのあまる事のうたなり　全
本尊聖観音　聖徳太子の作

古今大歌所
水茎岡
八幡の南の岡をいふ此岡[illegible]の
庄歌枕の名のこりけるにや
水茎の岡の屋かたに妹とわれとねての朝けの霜の降りはも

新古今
水くきの岡の葛葉も色づきて今朝うらがなし秋の初風
祝部成仲

続後撰　水茎の岡の浅茅の蟋蟀霜のふりはや夜寒なるらん　順徳院

新後撰　みつくきの岡の葛葉をふきかへし住む里のよそにて秋風そ吹　定家

玉葉　雁かねの寒く鳴しより水くきの岡の葛葉は色付にけり　人丸

同　いかはかりまてにしふれぬ水茎の岡辺の露をはく垣　為家

続後拾　津まとりかなく人へ見せはや水茎乃葉は乱もや見えぬを　前左大臣

新千載　代々の跡尋て見せ水茎の岡の浅茅の秋の夜の月　従三位行家

同　水茎の岡邊の篠の一節しかこのよにかはる古の聲も哉　前大信長

同　みなとのをとる乃葉替り秋風を兼むすへゐれと替ぬ露哉　六条内大臣

新後拾　水茎の岡への小田乃中立に霞かゝりて早苗とるなり　平常親

同　我すみも書とゝめぬ水くきのをかの筆をならひくる年は　従一位兼季

新続古　みつ茎の岡邊もかすみてやとる庵乃雲引たてゝゆる狩人　権中納言雅縁

夫木七百首　稀くわかれ入やとる人水茎の岡はやとるの秋はよの月　西行

同　水茎の岡乃霞て杉過てうれ書にの雁世の空の世　御製